

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：33941

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23660118

研究課題名（和文）特別養護老人ホームの看取り介護における看護師の体験

研究課題名（英文）Experiences of nursing staff in end-of-life-care at nursing home for the aged.

研究代表者

小林 尚司 (KOBAYASHI NAOJI)

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：90321033

研究成果の概要（和文）：看取り介護において中心的な役割を担う看護職員を対象に面接調査を行い、看護師の実践内容を抽出した。その結果は、高齢者の看取りの過程（安定期、下降期、臨死期、振り返り期）と、実践の対象者（高齢者に対する関わり、家族に対する関わり、施設職員との関わり、外部医療機関との関わり）の2つの視点から分類・整理出来た。特養における看取り看護は、各時期によって課題や援助内容が大きく異なっており、看護職員は、高齢者の状態からその時点で適切な目標や実践内容を判断し、家族や施設職員を導きながら実践する必要があると考えられた。

研究成果の概要（英文）：I conducted an interview with nursing staff in nursing home who play the central role in end-of-life care, and extract the practice contents. The obtained results were classified and organized from two points of view: 1) the process of end-of-life care for the elderly (stable period, downturn, near-death period, and look-back period) and 2) the target of practice (involvement with the elderly, involvement with the family, involvement with the facility staff, and involvement with outside medical institutions). In end-of-life care at a nursing home, the challenges and details of support differ significantly at each stage, and thus nursing staff are required to determine appropriate goals and practice contents at each stage based on the condition of the elderly patient, and perform care while guiding the family and facility staff.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：特別養護老人ホーム 看取り介護 看護職員

1. 研究開始当初の背景

わが国では、高齢人口増加に伴う大量死時代の到来が迫っている。国は、看取りの場所を、医療機関から介護施設および在宅に移行させようとしており、その一環として2006年の介護保険法改正において、特別養護老人ホーム（以下、特養）における看取り介護加

算制度を創設した。特養は、元々常時の介護を必要とする高齢者の介護施設であったが、今後は看取りの機能を持つことが期待される。しかし、特養で働く介護職員は、自分が看取りをすることを避けたいと思う傾向がある。したがって、看取り介護が拡充するためには、看護職員が自らの看取り介護における実践

能力を向上させ、介護職を適切にサポートできるようにすることが重要である。ただし、特養の看取りの看護について検討され始めてからの日は浅く援助内容やアセスメントの視点は明確になっていないため、現在は看取りの看護をどのように実践するとよいかを検討すること自体に困難さがある。特養の看取りにおける看護について、介護職員との連携を含めて、実践内容を明確にすることが急務である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今後特養で働く看護師が質の高い看取りを行うことができるようになるため、特養の看取りにおける看護実践の基本的な内容を理解するための研修に活用することを意図し、すでに看取りを行っている特養の看護職員が看取りをどのように実施しているのかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

看取り介護において、施設で中心的な役割を担っている看護職員を対象に、「看取りの実際」「看取りにおいて大切にしていること」「看取りにおける課題」などについて、面接調査を行った。主な対象は、A地域にある全特養をとした。A地域は、都市部から山間地まで広い面積を持つ地方都市である。

4. 研究成果

(1) 看取りの実践状況

調査を実施できたのは、A地域内の6施設と、近隣地区にある2施設の計8施設であった。A地域内の特養は14施設であり、面接を実施出来なかった6施設は、看取りを行っていなかった。

(2) 看護職員の実践内容

面接結果から、看取り看護の実践について語られた箇所を抜き出し、その実践内容を表す23のラベルが作成された。その後、個々のラベルが表す実践活動が、高齢者がどのような状態の時期に行うものか、誰を対象に行うものかによって分類した。高齢者の状態の時期区分は、「安定期：高齢者が介護を受けながらも安定した生活を営むことができる時期」、「下降期：食事摂取量や体重が減少し身体機能の低下する時期」、「臨死期：意識混濁や血圧低下などの危篤症状が出現する時期」、「振り返り期：死後に看取りの振り返りを行う時期」の4分類に整理できた。また、対象者によっては、「高齢者に対する関わり」、「家族に対する関わり」、「施設職員との関わり」、「外部医療機関との関わり」の4分類に整理できた。それらをまとめ、各時期の高齢者と家族への関わり（表1）と、施設内および外部との関わり（表2）に整理した

表1 各時期の高齢者と家族への関わり

時期と対象		実践内容
安定期	高齢者	死を迎える場所の意思を知るための問いかけ 下降期に入る変化に早く気づくための摂食状態の観察
	家族	高齢者への思いを聴きながら死を迎える場所や延命処置について考えることの促し
下降期	高齢者	看取りの状態であることの診断を目的とした受診
		バイタルサインのデータより生活の維持を重視する
		栄養より食べることを重視する食事援助
		周囲の音に反応がある間はなじみの場所で過ごしてもらう
		症状出現時において予後や家族の思いを含めて経過観察か受診かの判断
家族	高齢者の状態変化の見通しと看取りケアについての説明	
	死を迎える場所について決心することを求める	
	家族の理解度を基に看取り実施対象からの除外の判断	
臨死期	高齢者	できる限りの安楽のケア
		高齢者からの依頼に基づいた自らの価値観によるケア
	家族	家族の納得を得ることを目的とした受診調整
		高齢者に対する真情に近づくことを意識した対話
		主体的に高齢者に関わってもらうための働きかけ
		死を看取るための様々な観点からの死期の洞察
		振り返り

表2 施設内および外部との関わり

対象	実践内容	
施設内	看護	生活支援の観点で健康管理を行うことの指導
	介護	その時々における高齢者の状態と対応の説明
	全職員	看取り後のカンファレンスの開催
施設外の高齢者の姿を見せてケアを振り返る		
外部	医師	嘱託医の負担に配慮した死亡診断の体制の確保と維持

(3) 看護職員の思考

特養の看取りにおける看護師の実践について、看取りの過程による分類によって、各時期によって課題や援助内容が大きく異なることが明らかになった。また、各時期に渡って、「延命治療や死を迎える場所に対する意思をとらえ実現しようとする」「死に至る変化に早く気づき、なるべく正確に今後の経過を見通そうとする」「看取りの理想を探求する」「家族の納得を得ようとする」という姿勢が読み取れた。特養の看護職員は、こういった基本姿勢のもとで、高齢者のその時々状態に沿って看護目標や実践内容を判断し、それぞれの施設の実情に応じて実践を導いていると考えられる。

(4) チームにおける看護職員の役割

実践の対象者による分類と整理からは、高齢者および家族に対する直接的な援助のみで無く、介護職員をはじめとする施設職員や外部医療機関の役割を意識していることが読み取れた。その内容を図1に示した。

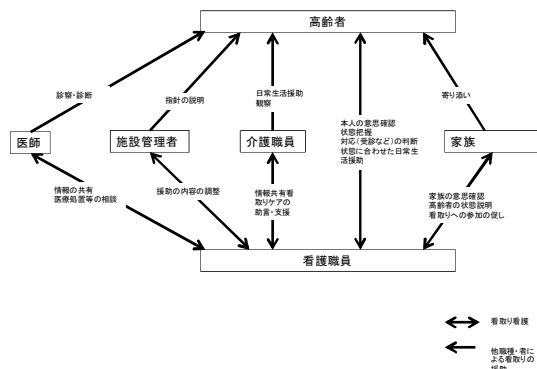


図1 特別養護老人ホームの看取りにおける看護職員の位置づけと役割・機能

特別養護老人ホームの看取りにおいては、看護職員がチームメンバーそれぞれの役割を意識し、調整役を担っていると考えられた。

(5) 実践内容から考えられる研修項目
 看護師の実践項目からは、以下の研修内容の必要性が示唆された。

- ① 安定期の間に高齢者および家族が看取りに対する考えを深めることや、延命処置や死を迎える場所の意思表示をすることが重要であり、その援助を行うための、高齢者の死の受け止め方を知る事。
- ② なるべく経口的に食事を摂取してもらうため、摂食・嚥下機能とそのアセスメント方法を理解すること。
- ③ 経口摂取できないことで脱水になった場合に点滴を行うことについては、効果と弊害の両方の意見があため、これらの主張についての理解すること。
- ④ 家族の不安を増大させないため、施設で看取らないという判断が必要であると理解しておくこと。
- ⑤ 高齢者と施設職員にとって、施設で看取りを行うことの意味について考えを深めること。
- ⑥ 家族の気持ちについて理解を深め、家族の真情に近づくための関わりについて理解すること。
- ⑦ 死期の予測に関する看護職員の経験知を、他の職員に伝達すること。
- ⑧ 研修においてこのような個々の施設の看取りの事後評価の取り組みを知ること。
- ⑨ 看取りの経験のない介護職員が死生観を深めて看取りをできるようになる過程を学ぶこと。
- ⑩ 看護職員は、嘱託医の他に協力医療機関を含めた医療体制作りや、そのことを施設管理者に働きかける立場であると理解すること。

(6) 本研究の意義

これまで、特養の看取りにおける看護実践の内容は、施設によってまちまちであり、特養の看取りにおける看護職員の実践を、標準化できるような資料は少なかった。本研究結果は、その資料となるデータを提示できたのではないかと考える。

(7) 研究の今後の展開

今後は、これらの実践内容を構造化し、特別養護老人ホームの看取り看護実践を総合的にとらえることを助ける、『看取り看護実践モデル』を作成する。また、そのモデルを教材として活用し、特別養護老人ホームの看取りの基本的な枠組みを理解するための教育プログラムを検討する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

(1) 小林尚司：介護保険施設における高齢者の看取りに関する文献検討、日本赤十字豊田看護大学紀要、査読有、7(1)、65-76、2012.

(2) 現在投稿中

[学会発表] (計 1 件)

(1) 小林尚司：特別養護老人ホームの看取りにおける看護師の実践に関する研究、日本老年社会科学学会第 54 回大会、日本老年社会科学、34 (2)、263、長野、2012.6

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 尚司 (KOBAYASHI NAOJI)
日本赤十字豊田看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：90321033

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし